書誌・出版史・書物メディア史のシリーズ
＊文圃文献類従 39＊

大澤 聡—編・解題

# 戦前期「論壇時評」集成
## ——1931-1936年

全二巻［編集復刻版］

論壇時評はメディア間を回遊する。
そう、自らの居場所を探索するかのように。
その航跡は生態的でさえある。
転変するメディア状況を陰画的に随時反映している。
そのつど、メディアの臨界点を如実に指し示した。
転位の要因は時評のメタ性に集約される。
論壇時評は「現実」を直截の対象としない。
「現実」（＝一次）を扱った「言説」（＝二次）に照準設定する。
いってみれば、三次的な言論形式を備えている。

『読売新聞』1932年12月6日

論壇時評（3）
新聞批評の批評
最近雑誌に顕る傾向の……
新居格

新たに総目次・著者名索引・人名索引を整備

【本書の特徴】

一、未整理のまま放置され続けてきた論壇時評に関しての初資料集。
二、「社会時評」から「論壇時評」へ時評のトレンドが転換した1930年代。本書によりテクストをとりまく当時の無意識的な前提条件の意識的な獲得が可能に。
三、政治、経済、法、文化、思想など多領域におよぶ社会現象を対象とした言説の選択的な集積により成り立つ論壇ジャーナリズム。これら論壇との相互浸透の中で形成された学知を捉えかえすための重要な基礎資料として本書は活用可能。
四、当該欄の資料価値とその分析行為がもたらす豊饒な可能性とが随所に垣間見える仕掛けをもつ解題36頁を付す。

金沢文圃閣

# 戦前期「論壇時評」集成
## ——1931-1936年

全二巻［編集復刻版］

### 知識社会学的思想史にとりかかるための恰好な資料

竹内 洋（京都大学名誉教授）

論壇という用語は、『言海』（大槻文彦）に「公衆ノ議論スル場所」とあり、山路愛山の『講壇と論壇』にもあるように、古くから存在していたが、一定の厚みをもった論壇＝論壇的公共圏は大正時代半ばあたりに成立した。それはつぎの三つの現象をもとにしていた。第一は、高等教育の初期的マス化である。1915 年から 1930 年の 15 年間に高等教育在学者は 5 万 7000 人から 18 万 2000 人と 3.2 倍に膨れ上がった。第二は、インテリゲンチャの訳語である知識階級という遂行的表象（理性的・討議的主体）の登場である。第三は、論壇をあらしめる総合雑誌というメディアの活性化である。その意味で、『中央公論』をモデルにして『改造』（1919 年 4 月）が創刊されたあたりから、一定の厚みをもった論壇＝論壇的公共圏ができあがったといえる。

『改造』に続いて、『文藝春秋』（1923 年 1 月）そして『経済往来』（1926 年 3 月創刊、1935 年から『日本評論』に改題）が創刊され、『中央公論』『改造』『文藝春秋』『経済往来』（『日本評論』）の四代総合雑誌の時代になった。雑誌や新聞紙面に「論壇時評」が登場する。論壇時評は時評を遂行することで論壇を言説的に「存立」させていく場であり、ゆえに論壇が存在するのは論壇時評があるからで、その逆ではない。そう喝破したのが、本編者大澤聡氏である。論壇時評によって、論壇的公共圏は可視化されることになった。論壇時評の記述から、論者たちの言祝ぎの関係、何を取り上げ、何を無視しているかなど論者間の呼応、補完、敵対関係の論壇的社会空間を透視することができる。昭和戦前期という疾風怒濤時代の個別言説を論壇言説編成の中で考え、個別言説が総体としてどのように論壇的言説に編成されていったのか、という知識社会学的思想史にとりかかるための恰好な資料がととのった。この貴重な資料の刊行を喜び、資料の活用による論壇史の研究の開拓と深化を祈りたい。

### 危機の時代を読み解く手がかり

米谷 匡史（東京外国語大学総合国際学研究院准教授）

戦間期から戦時へ向かう 1930 年代は、ファシズム、自由主義、共産主義が抗争し、諸矛盾が重層する危機の時代である。時々刻々と情勢が変化する切迫感のなかで、豊穣な言論が展開された。「論壇時評」という制度が造られたのは、まさにこの時期である。

ただし、「論壇」というものがすでに確立していて、それを批評する「論壇時評」があったのではない。円本ブームにつづく出版メディアの大衆化のなかで、『改造』『中央公論』『経済往来』（『日本評論』に改題）などの総合雑誌が並び立つ。アカデミズムとジャーナリズムが交差し、哲学・文学・歴史学・社会科学など学問領域の垣根をこえて、時局を論ずる幅広い言論の場として「論壇」が形成されつつあった。その渦中で、議論の争点や対立構図を浮き彫りにし、介入していく同時代批評として、「論壇時評」が生まれた。「論壇時評」という形式自体が、「論壇」が形成され変容していく過程の不可欠の一環であった。

この資料集成は、言論の場のダイナミックな変容と再編の軌跡を探るための、重要な手がかりになるだろう。当時の空気感を生々しく伝えるこの資料群を読み解くことで、危機の時代の言説空間が立体的に見えてくる。日中開戦の前夜、さまざまな可能性がせめぎあう言論のポリティクスが、そこには刻まれている。錯綜した迷路に分け入っていくための貴重なツールとして、この資料集成を活用したい。メディア史、思想史、文化史の探求を通じて、流動的な歴史のダイナミズムを甦らせるための得がたい道具箱である。

## 推◇薦◇文


＊文圃文献類従　39＊

編・解題―**大澤 聡**

推　　薦―**竹内 洋／米谷 匡史**

造　　本― A5 判・上製函・総 636 頁

刊行時期― 2014 年 9 月

揃　　価― 38,000 円

ISBN978-4-907236-16-8



【第一巻】（304 頁）

「論壇時評」欄

『東京朝日新聞』1931 ～ 33 年

『読売新聞』1932 ～ 33 年

大澤聡「論壇の自画像――解題にかえて」

【第二巻】（332 頁）

「論壇時評」欄

『東京朝日新聞』1934 ～ 36 年

『読売新聞』1934 ～ 36 年

総目次／著者名索引／人名索引


従来、文芸時評に関する資料整理は多少なりとも進められてきたはずだ。主に文学研究の領域がそれを担う。個別の作家や批評家が行なった時評行為の分析もごくまれにではあるものの試みられた。しかしその一方で、論壇時評に関しては検討されてこなかった。まったくといってよい。資料も未整理のままだ。これは奇妙なことではある。当時の知的読書の環境を把握するうえでも、あるいは言論空間の布置を総体的に描出するうえでも、論壇時評の資料的考察はむしろ不可欠であると思われるからだ。

既存の学問体系において、論壇時評は非属領的なテクストとして放置され続けてきたのである。時限性を帯びたテクストであるのだから当然といえば当然なのかもしれない。だが、そこには多彩な学問領域に貢献しうる基礎情報が搭載されている。じつに豊富に。のみならず、論壇時評というジャンルの履歴そのものが興味深い。当時の言論状況を適宜反映した長大なテクストとして十分検討に値する。また、メディア論の系譜をたどるうえでも資するところが少なくない。

そこで本書は、その空白を埋めるべく構想された。

〔本書収録、大澤聡「論壇の自画像」より〕


**編・解題者紹介**

1978 年生まれ。近畿大学文芸学部講師。専門は、メディア史および文芸批評。著書に、『批評メディア論』（岩波書店、近刊）などがある。



Kanazawa Bumpokaku

金沢文圃閣

〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30

Tel 076-261-8884　Fax 233-3111

□書店様へ…ありがとうございます

直接小閣までお申し込みください

図版はすべて本書より

価格は税別　045／07／4000